

岬から



唯 洋

「八時間コース」

はじめに夢の”物語”の舞台となる礼文島の、俗に言われる「八時間コース」について記そう。

周囲72kmの南北に長い礼文島の西海岸は、ほとんどが断崖の連続でわずかばかりの集落がぽつんぽつんとあるのみだ。自動車のために南北に連なる道路は整備されていない。

日本最北限のスコトン岬から島の南端の桃岩・元地灯台までは、かろうじて踏み固められた歩道が30数kmほどにつながっている。歩道といっても、ある所は海岸線そのものであり——高波や大潮の時にはその行く手も阻まれる——また、ある所は絶壁上の山道であり、そして丘陵上のお花畑でもある。

北辺の海上に浮かぶ「花の楽園・礼文」にやってくる若者の多くは、この西海岸の踏破を目指している。朝一番のバスで南端近くの桃岩・香深あたりから北上して、スコトン岬の手前（終点）まで行き、あとは自らの足でスコトン岬からG岬を経て、西海岸を南下する。

夕方、若者たちは不思議と思えるほど真ん中に素敵な穴のあいた貝殻を手土産にして宿に戻ってくる。

いつの頃からか、この行程が丸一日かかるため「八時間コース」と呼ばれるようになっていた。

G 岬

まだ九月の上旬だというのに、すっかり秋になっていた。

北国の可憐な花はすでに時期を過ぎ、かすかに咲き残っている一握りの花たちが、所々孤独に揺れている。

女と僕は喘ぎながら、G岬の頂き目指して登っていた。昨夜の雨も手伝って粘土状の斜面は滑りやすく、ふたり分のおにぎりとおやつ、そしてお茶の入ったリュックを背負う僕も、身軽な女もすでに汗だくだ。

秋の気配は斜面をよじ登るふたりの上を素通りして、辺り一面の熊笹は湿っぽい夏の余韻を残している。這いながら見上げる熊笹の斜面は、単調な風景ながら人間を圧倒するに十分な迫力でふたりを逡巡させていた。

後ろを登る、昨夜はまんじりともしなかつたらしい女の重い足取りに合わせ、僕はゆっくりと滑らないように登っていた。しかし足を何度も滑らせる女は、声を上げることもせず粘土状の斜面にぱったりと倒れ込んで、そのまま泥だらけのまま斜面に座り込むことを繰り返し、その度毎に小休止を取るふたりだった。

これまで二度、この八時間コースを歩いた時には賑やかな仲間たちがいて、ハイキングの気分を満喫していた僕なのだったが、今日はたったふたりだけの、それも昨夜知り合ったばかりの——昨夜は僕を最後の最後まで圧倒させたほどなのに、今日は打って変わってまるっきり無口の

――見知らぬ女との道行きで、何とも言い難い気分の僕ではあった。

会話のないままそれでも並んで座り込むふたりの眼前には、小嵐の過ぎ去った後のあまりにも青すぎる秋の空と、吸い込まれるようなみどり青い北辺の日本海があった。いつしか乾き始めた秋風がふたりの汗をぬぐい去り、しかしふたりは黙ったままだ。

さあー！

僕の声で、生乾きの泥だらけの姿でふたりは再び登り始めた。

ついにはほとんど四つん這いになりながら、熊笹の斜面を登るふたりの、無口のままの女よりは体力的に余裕を感じる僕は、昨夜、嵐の中を突然に現れ、僕のテントを占領してしまった時の勇ましかった女と、今、無言で僕の後ろを登る人物が同じ人間であることが信じられないでいる。

女との行きずりは少しばかり長めの僕の北海道旅行の、そのほんの一時のことに違いないのだからと、女の心の内までは探ることなど、はなから出来ない僕でもあった。

何度目かの「さあー」をいいつつ、上方を見極めての視界の開け具合から、標高百数十mのG岬の頂上は間近かだと確信して、「もうすぐだよ」と伝えもした後、女を振り向く僕の目には四つん這いの上目遣いの中、かすかに頷くそぶりの女がいて、その瞳には確かに感謝の心が見て取れた。

ありがとう。

ついには女の声を背にした僕でもあった。が、その一瞬後、女の

キャアーツ

という悲鳴とともに、女の腕は僕の右の足首をつかんでその体重全てを預けてきた。思わず斜面に張り付く格好の僕は滑り落ちるのを堪えるため、左手で熊笹を思いっきりつかまえたのだった。鈍い痛みを左手に感じながら、体の体制を整えながら掌を見ると、それは泥と真っ赤な血の混ざり合わさった、グロテスクな濁色のパレットのようなのだ。首に巻いた汗だくのタオルで掌をぬぐいつつ、女の所在を確認すると、女は2mほど下の斜面に張り付いたままぼう然と僕を見上げていた。数瞬後、気を取り直したらしい女は、自らの力のみで斜面をよじ登り僕の左側に腰を下ろすと、

ごめん

と語尾を持ち上げる抑揚でいいながら、僕の左掌を両手でそっと抱え込んだ。

汗と泥と血で汚れるタオルをそうっと剥がした女は、小指と薬指、そして親指の付け根の傷口を確認すると、ジーンズの腰に縛り付けたポシェットからハンカチを二枚取り出し、自らの口の中に唾液をため込む仕草なのだ。訝しげなままの僕の掌をつかみあげ、最初に小指と薬指の付け根に付いた汚れを、含んだ唾液の固まりによって流し落とすのだった。

二度三度と唾液を含み直して僕の傷口をきれいにする女は、まるで自らの子供に接する優しい様子で親指の付け根も洗浄すると、最後には傷口の毒を吸い取るように唇に含み込んで、唾液共々空中に吹き飛ばしたのだ。無口のまま「治療」を続ける女は二枚のハンカチを包帯代わりにして、僕の傷を縛り終えると、掌をそっと抱え込み頬と唇をすり寄せた。

これでとりあえずは大丈夫かも知れないわ。

ああ。

と答える僕に対して

もうすぐなんでしょう？

と先を急かす女だった。

すでに頂上近くらしく、緩やかになり始めた斜面はふたりが並んで登ることが出来て、立場が逆転した形の今は、女の腕に引かれて登る僕だった。

頂上は風化されて熊笹はなく、名も知らぬ雑草が岩肌の地面に張り付いて、わずかばかりの可愛らしい花が所々咲き残って、秋風に揺れていた。

岬の先端方向に歩くと、そこは標高百数十mの断崖の上で、身を乗り出して覗いてみても海面とこの岬の交わる接点は確認できない。少しばかりの沖の海面には岬の陰が突き出て映っている。

。

乾いた秋風がふたりを撫でて、三度目とはいえ新たな感動を僕に与えていた。

そして女はコースのまだ半ばにも至っていないというのに、すでに目的地に着いたかのような満足感をあらわして、岩肌に背をあずけ腰を下ろし脚を投げ出している。

先はまだ長いけれど、少し休もうか

女のそばに寄り、立ったままの僕は右手だけでハイライトを取り出し火を付けると、大きく吸い込んだのだった。

すると突然に目眩に襲われ、惨めにも墜落する恐怖感を覚えながら、必死で女にしがみついたのだ。

馬鹿ね。

と笑う女は、僕の指から滑り落ちた煙草を拾い上げ、今は女の足元にしゃがみ込む格好の僕を尻目にゆっくりと吸い始めている。

その落ち着いた表情と仕草は、僕より数歳は年上のまさに大人の女のものだ。

目眩から回復した僕はリュックから水筒を取り出して女に渡し、女のそばの安全な場所に改めて座り直し、もう一本の煙草に火を付けた。慣れない煙草を何度か吸い続けて、僕には軽い目眩感が今度は気持ちがよく、岩にもたれながら不思議な女との出会いを思い出していた。

意識が次第に遠ざかる中で、僕は鼻歌混じりの女のメロディを聴き、女をつぶやきを耳にした――。

ヤット、キタワ。ツイニ、キタワ。アナタノソバへ・・・・・・・・

前 夜

桃の形をした巨大な岩山の下にある、昔のニシン番屋を利用したユース・ホステル（YH）に二週間ほど連泊して、その雰囲気飽きてしまった僕は、二日前からYHの建物から数十m離れた岸辺近くにテントを張って過ごしていた。夕方から夏に逆戻りしたような生暖かい風を

伴いながら、断続的に強い雨が降り続く中、僕は固形燃料で作った貧しい食事をとり、今はコ

ーヒーを飲みながら「ハックルベリ・フィン」を読んでいた。

しっかりと岩に固定してはいても、バタバタと騒ぐテントと一緒にカンテラは大きく揺れ始めていて、落ち着いてページを追う雰囲気ではない。しかし、明かりを消してこの小嵐の中で眠ることの方が難しい。

二ヶ月近く、新聞やTV・ラジオからは遠ざかる「生活」をしてきたとはいえ、吹きすさぶ海辺の嵐を子守歌に出来るほど、性根の座った僕ではないのだ。睡魔のやって来るのを心待ちにしながら、20ページほどを読み進むのだったが、しかしついに非常時だと自らに言い聞かす僕は、キスリングの底から滅多に飲まないポケット・ウィスキーを取り出すと、チビリと舐め始めた。

強い液体が喉から食道を通り胃に達すると、弱き精神の救い主となるべき液体は僕の肉体と急激に同化し始め、待ちこがれた安堵感を少なからずもたらしたのだった。

日常の異常が、日常に不安を感じたとき、すぐにそれに付け入るように。

異常が異常でなくなるのは、二十歳に届かぬ人間には訳もないことだ。

しばし嵐を忘れさせる安堵は、しかし長続きしなかった。

嵐の中、確かにテントの外からかすかに呼ぶ声がしているのだ。

最初、YHの人がテントの様子を見に来たのかも知れないと思う僕だったが、しかし声の主は女のようなのだ。次第に声が大きくなり

アミー！

と確かに僕を呼ぶのだった。

僕はシュラフから体を出しながら、声の主は同い年ぐらいのノンちゃんーアルバイトか居候なのか定かでない、それでいて四六時中YHの受付や調理場にまわりついているーだと確信して、テントのファスナーを開けたのだった。

ノンちゃん！ 僕だったら大丈夫だよ

大声で答える僕は、テントの入り口から頭だけ出して、雨の中懐中電灯をテントに向けて立つ2mほど離れた所の声の主を認めた。電灯の明かりが眩しく声の主の顔は確認できずのままに

ノンちゃん。とにかく濡れるから早く入りなよ

と僕は声をかけたのだった。

そしてテントに転がり込むように入ってきたのは、全く見ず知らずの女だった。ジーンズにサファリジャケットをはだけての、白のTシャツ姿の女はすでにずぶ濡れで、中腰のまま濡れた長い髪からは滴をしたたかせ、思わず恐怖感を僕に与えたのだった。

おじゃまします

声の出ない僕に女は答え、わずか二畳ほどの空間に広げたままのシュラフの上で、腰を抜かしついに気をついた僕だった……

アミさんね？ ホントにごめんなさいね、突然に

気が付くと、シュラフに横たわった僕のすぐ側で、横座りの女が至近距離でのぞき込んでいる

揺れるカンテラの陰になる女の顔は定かでなく、恐怖心の残る僕の顔は引きつっているようで

お化けじゃないわよ。ほらね

女はいつの間にか枕のように僕の首下に入れてあった左腕で、僕の頭を軽く抱くとTシャツのそのふくよかな胸に押しつけるのだった。

思わず女を押しつけガバッと上半身だけ起こすと、確かに夢でもお化けでもない、狭苦しいテントの中の現実だった。入り口のファスナーは閉められていて、雨風は相変わらずテントを揺らしている。

でも、一体何なんだヨ！

僕はキスリングからタオルを出しながら、不可解な女に始めて問うのだった。見ず知らずの女の髪はまだ濡れていて、なぜだか分からぬままにタオルを女に渡しつつ

いきなり、こんなじゃ困っちゃうよ・・・

と付け足した。

ごめんなさい。ホントに。ちょっとお願いがあって・・・

それにテントの中も濡らしてしまったみたいね

タオルで僕と同じほど肩まで伸びた髪を拭う女はいう。

嵐の中、安眠をもたらす救い主を求めていたばかりのテントへの、いきなりの乱入者はタオルを使用し続けながら、混乱した僕とは裏腹に言葉を選びつついうのだった。

突然だったのはホントにごめんなさい。

でも、どうしてもあなたに、アミさんをお願いがあって来たの・・・

僕のこと知ってて来たのか？ 僕は君のことなんか知らないけど。

私は知っているのよ。一昨日夜のYHのミーティングで会ってもいるのよ。

私はアミのこと意識して覚えていたから。

でも、昨日急にいなくなってしまうって、正直焦ったのね。

だから??

昨日の夕方、高校生ぐらいのアルバイトの女の子に聞いてみたの。

ノンちゃんに？

そうそう、ノンちゃんだわ。 あの子、二学期がもう始まっているのにどうしたのかしらね？

で、ノンちゃんいわく、私の尋ね人は「テントの中」だって。

でも昨夜は天気も良くて、YHから抜け出せなくて・・・ ??

結果はそうだったけれど、私の「願い事」は別にあるの。

「願い事」は「アミ坊に頼めば」とも教わっていたし。

ウン??? ノンちゃんから？

違うってばあ・・・

「願い事」が先でそれを叶えるのは、アミ、そうあなたしかいないって。

そういうことなの。わかった？

悪いけど、まるっきり判らないナ。

ノンちゃんが「アミ坊」って僕のこと呼んだのか？

ウウン、違うよ。

そう呼んだのは、細面で、あご髭をのばした男のヘルパーの・・・

ヤギさんだ、きっと。

そう、ヤギさん。そうだわ、ヤギさんヨ。

テントの中には笑い声が起こり、雨の音も風のテントを揺らす気配をもけ散らし、テント近くまで押し寄せる波の音も、消し去ったかのようだ。

しかし、僕には理解できぬ現実が現実のままなのだ。

シュラフの上で、膝下を乱暴に切ったジーンズのパンツとTシャツ姿のまま、胡座をかく僕とは合い向かいのかたちで――僕のシュラフの足元はテントの入り口、その入り口側にいつの間にか、女は僕のキスリングを丸めて置いていて、すっかり使い慣れた大きめの枕のようにもたれ掛かっている。ジーンズの足は狭い空間で異様な長さを誇り、胡座の僕の横を越えて――構える女は僕の気付け薬のはずのウィスキーのボトルを手にしてさえしていて、断りもなく飲み始めているようでもあるのだ。

ところで「願い事」って何のことなんだ？

あとで話すから今はこのままでいさせて・・・

今はどうしても、こうしていなくては前に進めないから、、、

でも、僕にとっては何が何だかで困るんだけど・・・

お願いだから、今はこのままでいさせて。

きっと、この、お、、、お、お礼はするから。

でも、YHに戻った方が良くないかな？ 実際、僕もYHに避難したいぐらいなのだから。

この嵐だったら大丈夫だわ。明日はすっかり晴れるから・・・ 昼間に会った香深の漁師さんが話していたから、私はそれを信じているの。 明日はきっと良い日和だわ・・・

あっ、黙っていただいてゴメン。これ返すわネ。

女は残り少ないポケット瓶を、胡座をかいたままの僕に返した。

しかし言葉を継ぐことの出来ない僕ではあった。「お手上げ」との気分からか、胡座のままの僕は両手を八の字に開き、続く動作としてぼったりと自らの寝床へ倒れ込んだのだった。

突然の乱入者に今は見守られるように・・・

時間の経過は不明のまま、カンテラの明かりで目が覚める。

首を少し右に傾けると、僕のシュラフと平行に腹這いの女が僕の「ハック」を読んでいた。カンテラの明かりが文庫本に届くように、頭は大きく横へ傾けていて、その女の視線に動く僕の姿が映ったようだ。

若いのにすぐ眠ってしまうのね。

アミが起きている間に「願い事」お願いして良い？

大したことじゃないけれど、明日、一日だけ私に付き合っしてほしいの。

予定は特別にないでしょう？

特にないけれど・・・どこか行きたいのか？

そう。「八時間コース」にね。

ＹＨでは今そのツアー、自粛してるでしょう？

でも、個人で行くのは構わないでしょう？って、聞いてみたら「それはそうだけど、ひとりじゃ危ないよ」って、あのヤギさんが云った訳。

それでね、「どうしてもというんなら、テントの変人に頼んでみれば」って。

変人？

あっ、ごめんネ。それはヤギさんが云ったのよ。

あなたはもう二回も歩いたんでしょう。

「頼むんだったら、あいつしかいないな」とも云うのね。

女はすでに本を閉じていて、今は体が触れ合うほどの側で僕を見つめている。

一週間前の「八時間コース」で、30前の男が転落死する事故があった。

ＹＨの宿泊者ではなかったが、バスで一緒になったＹＨ組と結局は同行する形になって、G岬で休憩をとる間に、原因不明の転落をしたのだった。

お願い。いいでしょう？

僕は別に構わないけれど、天気が心配だな。

明日はすっかり良い天気になるわ。私はそう信じてるから大丈夫。

じゃあ、OKなのね。ありがとう。

女は咄嗟に顔を僕に近づけて、頬にキスをする。

おにぎりなどは私が頼んでおくから、あなたは私を案内してくれるだけでいいわ。

ホントにありがとうね。

今のうちにシャワー浴びない？ 天然のシャワーをね・・・

言葉の出ない僕の目の前で、女は座ったままジーンズをすでに脱ぎ始めていて、

誰も見ていないから平気よ。アミも早くしたら。

シャワーが止んでしまうわよ。

ついにはTシャツをとってしまった女は、パンティ姿のまま中腰に立ち上がってテントのファスナーを開けていた。

タオル借りるわね。

入り口で振り向き様云う女の胸は右腕で隠してはいても、揺れるカンテラの明かりに見え隠れして、若すぎる僕を困らせてしまった。

僕は半ば気絶しかける状態で、シュラフの上に再び仰向けに寝ころんだまま、身動きできないのだった。

主客が逆転した惨めな混乱のまま、僕は「一体何なんだ、何者何だ！」とつぶやくのみだ。

アミー、早くおいでよ。とっても気持ちがいいわー。

女が呼んでいる。

恥ずかしいの？ 早くおいでよ。

ついには観念する気持ちで、Tシャツとジーンズを脱ぎパンツのまま外に出る僕だった。生暖

かい風の中、雨は降り続けている。

おいでここよ。

すぐ側で見えない女の声だけが聞こえて、声の方向に目を凝らすと、かすかに漏れるテントの明かりでようやく女の所在が分かる。髪は闇にとけ込んで、女のかすかな輪郭は天を仰いでいる。

パンツ脱いだら。どうってことないわ。

お馬鹿さんね。ふふん・・・

おどおどして声も出ない立ちつくす僕に、女はすり寄って耳元で笑っている。

どうってことないでしょう？ 私たちだけなんだから。

闇夜にうち寄せる波の音が、少しばかり強く降り続ける雨音を消し、天然のシャワーは寄り添うふたりを包み込み、ついには母親に抱かれように女の腕の中の僕だった。

アミ。あなたしばらくお風呂入ってないでしょう？

テントの中、かなりにおってたから。

汗だけでも落とそうね。

首にタオルを巻いた女は、両手を僕の頭に近づけ指ですくようにして僕の髪をほどき、掌で僕の額から頬、首筋をさすっている。

正面に向き合う女の無防備な胸元は、夜目に慣れた僕の目の前で輪郭を次第に明らかにしゆらゆら揺れている。女の優しく僕の体をさする仕草につられる形で、僕は女の両脇の下に腕を回した。

僕の首筋をなで続けるままの女は、まるで日常のことのよう僕になすがままで、僕の顎を肩に乗せる格好で僕の抱擁をしっかりと受けとめた。

突然にテントに現れた女のなすがままに圧倒され続けた僕自身が、始めて自らの意志で行動を起こした瞬間でもあった。

そう、元気を出すのよ。生きているんだからね。

お互いの頬をすり寄せあい、女は僕の背中を抱いてさすっている。素裸の女の腰に手を回す僕は、自己主張を始めた股間がパンツの中で行き所を失い、今にもはじけそうなのを必死になって堪え、腰を引き女の首元に頭を預けた。

これ邪魔だわね。

その瞬間、女は僕のパンツに手をかけて引きずり下ろそうとして、しゃがみ込んだのだ。

おい、止めてくれ！

小さく叫ぶ僕だったが、パンツは足元まで下げられて、僕の尻を抱く格好の女に犯されそうなのだ。いきり立っていた股間は女の胸元で急速に自己主張を失うようだ。

あらま、可哀想に、そんなにいじけるほど恥ずかしいの？

今は立ち上がって、僕を優しく抱きとめる女だ。

恥ずかしいのではなく、あなたが怖いんだよ。

怖い？ ああ、そうね。驚かせてばかりだったから・・・

可哀想というより可愛いわね。お馬鹿さん。元気を出すのよ。

女に強く抱かれた僕は女にすがりつくようでもあった。

沈んでいても仕方ないでしょう。

今を見るのよ。こうしている今を生きるのよ。

私は今、アミとこうしていただけなの。こんなことって滅多にあることじゃなし。

悩まない、悩まない。

あなたがたまたま男で、私がたまたま女だということ。

生きることは偶然の積み重ねみたいなもので、自分の意志なんてそんなに通用する事でもないのだから・・・

ゆりかごを揺らす母親のように、女は僕をそっと抱きしめながら緩やかに右左に揺れて、止めどもなくしゃべり続けるのだった。

不思議と暖かい雨は小やみなく降り続け、今はお互いの体を掌のタオルで拭い続けるふたりを包んでいた。

さーっと、シャワータイム終わりにしようか。

私は中に戻るから。タオルこれしかないの？ 先に使わせてもらうわね。

先を急ぐばかりの女のペースはそのまま、置いてけぼりを食らう僕はテントに入る女を見送るだけだった。

女の呼ぶ声がして、タオルを渡す手がテントの入り口に現れた。

絞り直した方がいいわよ。

絞ったタオルで前を隠す格好で中にはいると、こまごまとした小物はテントの端々に追いやられ、すっかり広げられたシュラフの上に女は横座りしていて、腰には濡れたままのTシャツを乗せ、素肌の肩にはジャケットを掛けている。タオルで前を隠し中腰のままの僕を見上げる女は優しく、しかし命令のように云う。

拭いてあげるから、さあ座って。

女に背を向ける形で座る僕でしかなかった。僕の体を拭きながらも、女の髪からは時々滴が垂れて、僕と交互に自らを拭き直す女でもあった。

今夜はこのままここにいさせてね。

早起きは得意だから心配ご無用よ。

さあ、もう寝ましょうね。

といたって、狭すぎるよ。僕はどうしたらいいんだい？

単なる敷物と化したシュラフを占領する女は、横座りのまま腰を動かして、脚はシュラフの中に入れずに伸ばして、右腕で上半身を固定させてシュラフに狭いながらも空きスペースを作るのだった。

ここにおいでよ。抱き合っただけ眠るのも悪くないわよ。

Tシャツは腰にかけたまま、上半身はすっかりはだけて女は僕を招くのだった。

パンツぐらひはきたいな。

ご自由に。別にあなたを取って食おうなんて思わないから。

アミは自由にしてもいいけどね。

テントの隅のキスリングからパンツを見つけた僕は、せめてもの抵抗のつもりで中腰の背中を女に向けて、パンツを不自由な仕草ではき、カンテラの灯を消した。

僕は女の体から出来るだけ離れて、背を向けたまま畳一畳ほどに広げられたシュラフの端へ横たわった。

アミ。こっち向いてよ。お願いだから。

僕は女を無視して、無口を続ける覚悟だ。しかし、今夜は眠れないことを予感しもしていたのだ。

とんでも無い行きずりで、びっくりさせてしまった事は謝るわ。

私は明日にはもう居なくなるから、だからもう余計な迷惑はかけないつもりよ。

いつかあなたも内地へ帰るんでしょ？ 私は明日には向こう側へ行くのだから。

「八時間コース」へ行くのなら、明日も泊まりだよ、礼文に。

つい、話してしまった事を後悔する僕だ。

ううん、気持ちの問題だわ。

明日になればもう、あっちへ飛んじゃうのよ、そういうこと。

僕はもう少しゆっくりしていくつもりなんだ。

そうね、若いんだからそれもいいわね。

あなただってまだ充分若い癖して、可笑しいヨ・・・

無言の時間がしばし過ぎて、僕は女の気配を背中に感じた。

お願い。あなたを抱いて眠りたいから・・・

女は僕の首の下に右腕を枕のように入れると、胸を僕の背に張り付けて、左腕で僕のおなかを抱くのだった。

これでは、とてもじゃないけど眠られないよ。

大丈夫、きっと眠れるわ。

そんなこといっても、困るんだよな。

どうして？

どうしてたって、僕は男だよ。

こんな時には男だったら、男らしくネ。そうしたらあなたはぐっすり眠れるわ。

僕の肩に暖かな液体がこぼれ落ち、ついには女のすすり上げるような声が聞こえる。

女の腕から逃れた僕は、闇の中で窮屈な動きで体を半回転させ、女と向き合う。

どうしたんだよ。泣いたりして。

お願いだから、私を抱いて・・・

すぐさま女は僕にしがみつくように、抱き付いてきた。

女の涙の意味を知らずのまま、僕も女を抱き返した。女は上半身をひねって、僕の胸元から上に重なって、唇を奪い、まだ流れ続ける涙が僕の頬を伝う。

アミが男になればきっと私の涙も止まるわ。

僕の首筋から次第に胸へと唇での愛撫を続ける女で、すっかり戸惑う僕はしかし、くすぐった

くてついに悲鳴を上げてしまった。

ちょっと、待って待って。くすぐったいよー！

ふふん、うぶなんだ・・・

涙の乾かないはずの女は、苦しそうにも笑い声をあげて、ついには僕のパンツに手をかけ下げ始めもして、攻撃の手を緩めようとはしないのだ。

お願いだから、私を抱くのよ！

僕の胸の上で涙を流し続ける女のなすがままになり、ついには女に犯されたのだった。 女の上で気を失いかける僕の耳に、女のかすかなささやきが聞こえた。

ありがとう、アミ。 これで私はきっと旅立ってるんだわ・・・

おーい、アミン坊一、朝だぞー！

テントの外から聞き慣れたヤギさんの大声が聞こえて、僕は目覚めた。 体はすっぽりとシュラフに包まれて、いつの間にかパンツも付けている自己を確認すると、飛び起きた。 昨夜の出来事をすべては思い出せずに、しかし気分は晴れ晴れとしている僕だった。

べっぴんさんに置いてかれるぞー！

起きないと石の爆弾が飛んでいくぞー！

と、いきなりテントは揺られるのだった。

慌ててテントから仰向けのままで顔だけ出すと、山羊の髭面が目に入った。

早く着替えて来いよ。今日は特別に朝飯も用意してやったからな。

それにべっぴんさんが朝も早ようから待ちくたびれておるしね。

念を押して置くが、べっぴんさんはうちの大事なお客さんだからな。

くれぐれも粗相のないようにな。

間違っても間違いだけは間違いなく起こすなよ。

リュックだけは忘れるなよ。案内人の旦那さんよーっつと。

ヤギさんはそれだけまくし立てて、とっととYHに戻っていった。

テントの入り口から望む海はすっかり穏やかに揺れていて、静かな潮騒が耳に心地よく響いている。上半身裸のまま裸足で外に出ると、テント横の小岩の上で女が本を読んでいる姿が目飛び込み、焦ってしまう僕だった。

お早う、てっきりYHにいるのだと思っていたから・・・

バスまでのタイムリミットはあと30分よ。お早う。

本を読み続ける女は顔を上げずに答えた。

女の手にする本は僕の「ハック」だった。開いたページはすでに後半部分だ。

5分でYHに行けるわよね？

「ハックルベリ」借りて行っていい？。あともう少しだから。

うん、構わないよ。準備は簡単だから、上着を着て靴はいて、サブのリュックを出すだけだから。

でも、朝食が僕の方まで出るって本当かな。信じられないよ。

それは大丈夫、あのヤギさんと取引済ませたから・・・ ドン・マインね。

サンクス。でも、どうやって？

それが簡単だったのよ。

本を閉じると立ち上がって、僕に近づく女は云った。

かすかに腫れぼったさの残る女の顔は、しかしあまりに童顔で大きな瞳を輝かせて、思わずハッとした僕だった。旭川で見た「いちご白書」の主人公に似ていると思う。僕を正面から見続ける女は続けた。

まだ薄暗いうちにYHに戻って――

アミは私の上でホントに寝入ってしまったから、あなたを起こさずに出かけるの、正直大変だったけど――

でね、部屋から降りてきた振りして調理場へ行ったの。

ノンちゃんは居なくて、ヤギさんとあまり知らない人たちが居て、朝食の準備中だったのね。

「お早うございます」って、空元気だったけれど、思いっきり叫んだわ。

そしたら、ヤギさんなんか「OH-!? My 神よ」って叫んで、

包丁を自分の足元に大げさに落としたあげくに、

「Good Morning My Lady おややまあ、私・とても・サプライズだわ・・・」って、山羊面してあの調子なのよね。

しめたと思ったから、すかさず「お昼用のふたり分のおにぎり、お願いします」ってね。

「これからテントの人に約束の確認にも行くから、きっとよ」って。

おいおい、ちょっと待ってよ。時間がなくなっちゃうよ・・・

青さを刻々と増しつつある海を真正面に見続けての会話に、僕は終止符を打った。

YHへの道すがら、見上げるYHの上に覆い被さる桃岩は青空にで一んとそびえて、すっかり上天気だった。

ヤギさんは自分もテントに行ってあげるからって、

テントの変人はちょっとやそつとでは絶対に起きないから、

石でもぶつけてやらないとね・・・とも云ったのよ。

YHの食堂で「投石そそのかし事件」の見返りとして、サービスのモーニング・コーヒーをヤギさんに直接入れてもらい朝食をとる。

食事のふたりから決して目を離さないヤギさんは、何度も近くまで来てあれこれの注意やら話を続け、時には女の耳元で特別な注意を僕へも聞こえるように話していた。

バスの時間が迫り、玄関先まで見送りにきたヤギさんの恨めしそうな顔と別れ、ふたりは遠足に出かける小学生のように、

行ってきまーす！ ヤギさん、お留守番頑張ってね！

と、はしゃぎながら出かけたのだった。

ついには見送りのヤギさんにしっかりと見えるように、バス停への途中YHからは見えなくなる最後の曲がり角で、両手をしっかりとつないで手を振ったふたりでもあった。

バスの終点・白浜へ向かう途中、始めは「ハック」を読む女だったが、いつしか僕の肩にもたれ掛かり、道中半ばからはすっかりと僕の胸の中に眠る赤子のようだった。

再びG岬にて

目覚めると、女は岬の突端近く一段と高い岩の上に腰を下ろしていた。

アミ、あなたもおいでよ。とっても良い眺めだわ。

女の座る岩に不安を感じながら近づくと、女は身を乗り出すほどにして、岬の足元をのぞき込んでいる。僕も女と同じ岩に乗ると女の側に腰を下ろした。

少なからず恐怖心を抱きつつ眺める目の前に開けた光景は、僕の心とは裏腹に空は限りなく青く澄み渡り、みどり青い海面は南国の海のような。

ここから下に飛ぶと、岩に当たってしまうかしら？

ウン？ 何だって？！

例えばね、ここから石を投げたら海にまっすぐ届くかしらってこと。

思いっきり投げれば大丈夫だよ、きっと。

アミ、ちょっと試してくれない・・・

僕は岩から降りて手頃な小石を拾うと、女のいる岩には登らずに思いっきり力を込めて、遠く、高く真っ青な空目がけて投げた。

岩の上で石の行方を追う女と僕の視線の中で、ゆっくりと弧を描きキラキラと光りながら小石は飛び続け、やがて足元の崖の陰に消える。

物音は聞こえない。

無事に着いたかしら・・・

きっと大丈夫だよ、無事着水してるよ。。。。

僕はこの時、ここから転落した男のことを思っていた。彼は予期せぬ人生の終わりに、何を願っただろうか。おそらく海面に落ちるまでの間、何回何十回となく岩にたたきつけられ、肉体の破壊とともに意識のない世界へ飛んでいったのだろう。

女は岩から降りてきて、夢の覚める前座っていた場所に座りその背を岩に預けた。

お昼にしようね

早すぎると思うけどなあ まだ三分の一ぐらいしか来ていないよ

じゃあ、おやつってことにして

水筒から茶を上蓋に注ぐ僕の隣で、女はナップザックからキャラメルと、ひとり分のおにぎりが包まれた新聞包みを取り出してほどこき始めていた。

まだ早いつて云ったつもりだけれど

無理に今、食べようってことではないの アラッ、ひとり分が三つってことね 私はひとつで
良いから、後はアミの分よ

いつの間にか、ふたりはG岬のてっぺんで兄弟のように寄り添い寝入っていた。

女は「ハックルベリ・フィン」を胸に抱いている。

おそらく女がたむけたものらしい「花」と「おにぎり」が、こじんまりとした岩の上にあった

。

そして夢うつつの僕の視野に女がさぁーと駆ける姿が入り、目の前を駆ける女は一瞬僕を見つ
めると同時に、

じゃーね！！

とって、まるで走り幅跳びのように歩幅をあわせると、岬から飛んでいってしまった。

僕は馬鹿野郎って叫びながら、女の残像を思い浮かべて助走をした。

そして死への最後のステップ直前で、小石に足をすくわれて、顔面から岬上の大地に倒れ込
んだ。

ギャー！

という、大きな叫びで目覚めると、ベッド脇に立つ妻が恐怖に顔をこわばらせ、起きあがろう
とする僕から身を引いたのだった。。。。。